

研究発表会の振り返り

第 1.2 学年生活科「あそび名人になろう」

授業者川村 繁博

本時の主張点

フローチャートを比較し手順や運営に必要な要素を推考することで、探求力と省察性が育まれるだろう。

1. 授業づくりの「しかけ」と子どもの探究

新一年生を迎えるおもちゃランドを企画することで相手意識と目的意識を高める。

思考や行動とフローチャートで可視化してつなぐことで課題を共有し、協働的な学びを深める。

1. 1 異学年の協働的な学び

新型コロナウイルス感染症の影響で子どもたちは、従来行ってきた交流学习や体験活動を充分には行うことができていなかった。

今回の実践では、新一年生を迎えるおもちゃランドを計画した。対象や活動と目的を明確に捉えさせることで、相手意識をもち、自らの行動を俯瞰的に捉えて推考する力の育成をはかった。

また、複式での学びの質の向上を目指し、異学年が目的を共有し上学年と下学年の協働的な学びを目指し単元を構成した。

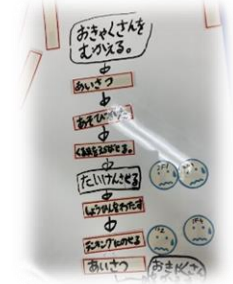
2 学年の子ども達が共に活動し学ぶ中で、1 年生は新しく出会う新入児に思いを馳せながら 2 年生は下学年と関わることで上級生としての役割や責任感を自覚させることで、新学年での活動や学習に対する意欲・関心の向上を目指した。

1. 2 本時までの流れ

子どもたちは、来年度入学する新入児を迎える会の 1 つとして、興味・関心別に 4 つのグループに分かれておもちゃランドを計画した。臨時休校

中の家庭学習では行えなかった作ったおもちゃで友達と遊ぶことや、遊び方やゲームのルールを決めることなどを経験した。

まず、おもちゃランドの流れをフローチャートに表してから、その手順に従いペアグループをお客さん(新一年生)に見たててリハーサルを行った。



かずや:緊張しているかもしれないから挨拶からしようよ。

ゆい :初めに遊び方教えてあげなきゃいけないね。

たくや:新しい1年生が分かりやすいようにルールを書いておこうよ。

みき :でも、まだ字が読めないんじゃないかな。

しんじ:平仮名だったら幼稚園の頃から読めたよ。

かずや:景品をあげるときっと喜んでくれるよ。

子どもたちは、新しく入学する新一年生の姿を想像し、自分たちが入学したころの様子と照らしながらおもちゃランドを計画し、リハーサルを行った。また、ペアや自分達のおもちゃコーナーについて気づいたことをメモした。対象を来年度迎える新一年生と明確に設定することで相手意識をもち、2 学年の子ども達が主体的に協働的な学びに向かうことができた。

2. 本時のねらいとフローチャートの活用

「楽しく」「分かりやすく」「安全に」という 3 観点をもとに、4 グループの活動やフローチャートを比較することで活動に必要な視点を捉えさせ、適切な活動を決定させる。

2. 1 本時での活動の概要

本時では、前時での体験と体験をもとにした気づきとそれぞれのグループのフローチャートを比較することからおもちゃランドの検証を行った。また、「対象とする新一年生」と「安全」「分かりやすく」「楽しく」という3観点に着目し整理させることで、探究の質の向上を図った。



2. 2 フローチャートの価値

おもちゃランドの運営には様々な要素が存在する。対象となる「客」「活動の手順」や「準備物」等である。低学年の子どもたちは、それらを体験を通して試行錯誤しながら、修正・改善を行いながら身に付けていく。発達段階を考えたとき、私自身もそれが当然のことであり、価値ある経験であると考えている。

しかし、同時にこれらは子どもたちが各々に感覚的に判断し決定しているとも考えている。また、お互いの思いや行動をより理解し共有させることで、協働的な学びをより深い探究に繋げることができるのではないかと考えた。

そこで、まずフローチャートを用いて、活動内容を比較したり、検証したりすることでおもちゃランドの運営に必要な要素や手順を推考させた。

フローチャートで、自らの活動を可視化して話し合うことで省察を促し、「安全」「分かりやすく」「楽しく」という3観点を達成するために必要な要素を見出し適切な手順を見出させたいと考えたからである。

3. 本時の授業と考察

4グループのフローチャートを比較し共通する内容を確認し必須の活動を確認した後、グルー

プにより異なる内容から活動の意味や必要性を考えた。共通した内容を確認する中で「体験」は4グループともに必要だがヘンテコ動物のコーナーは「あまり遊ぶことがなかった。」「体験は遊ぶだけでなく工作してもらったのもいいんじゃない。」等の改善点が出された。また、「遊び方」「ルール」「説明」については、共通する内容ととして取り上げられた後、その意味を確認めたり統合したりすることができた。

次に、いくつかのグループにしかない内容について、その必要性を考えた。

T : しょうどくをしてもらうはいるの?
まい : いるよ
なみ : 今コロナだから、指をきれいにしないとしんじ: 感染対策。
なみ : ころなになったら私たちのせいになっちゃうもん。
ゆうき: べろべろってしたらだめ。
たくや: マスクをしないとコロナにかかるかもしれない。
なな : 床にテープを貼って、並ぶところを決める。
めぐみ: そこに立ってソーシャルディスタンスをとる。

フローチャートを比較することで子どもたちはお互いの活動の価値を確認め、活動のもつ意味理解を深めたり広めたりすることができた。

4. 授業後の活動

本時で修正改善したフローチャートをもとに、本校5.6年生複式の子どもたちを招いて最後のリハーサルを行った。そこには、本時で出された改善点以上に遊びを工夫したり会場を改善したりする子どもたちの姿があった。子どもたちは、フローチャートや話し合いだけでなく体験で培った経験をもとに新しい活動を生み出していく。今後も、体験とフローチャートとプログラミング的思考を往還的に組み込んだ学習を展開していきたい。

